

2024.12
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま
富 薬

12号

第46巻

No.425



クリスマスローズ *Helleborus niger* L.

(キンポウゲ科 *Ranunculaceae*)

生 薬 クリスマスローズ 秋に根茎、根を掘り取り、水洗後陽乾する。

成 分 強心配糖体:hellebrin,hellebrigenin,hereborin,helleborein、その他:protoanemonin等。

効 能 昔、ヨーロッパでは少量を瀉下、強心、駆虫、通経に用いたが、毒性が強いため現在は用いない。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



クリスマスローズ (*niger*種) はヨーロッパ南部～中央部の高山地帯に分布しています。日本には明治初期に渡来し、花壇・切り花用に栽培される草丈15-30cmほどの常緑の多年草で、短い根茎や根も黒いところから、種小名の*niger* (黒を意味する) や英名のblack helleboreの名がついたと考えられます。葉は根生し、掌状複葉で小葉は7-9個、革質で光沢があり、濃緑色、ときに葉先の縁に数個の鋸歯があります。12-2月に葉間から花茎を出し、白色(後に紫色を帯びてくる)の花をやや下向きに単生します。5枚の花弁のように見えるものは萼片で、花弁は退化し、雄蕊の根元に蜜腺としてのみ存在しているため分かりにくくなっています。12月のクリスマスローズの頃から咲き始め、バラのような白色の花をつけることから、Christmas roseの名がつけられました。花弁に見える萼片は散ることがなく、花の少ない冬に長く鑑賞できることから人気があり、古くから栽培され、他の同属植物と交雑しやすいため、多くの園芸品種が作り出されています。

3-4月頃に咲くハルザキクリスマスローズ (*H.orientalis*) もクリスマスローズの名で呼ばれ混乱していますが、原産地のヨーロッパではレンテン・ローズ (Lenten rose) の名で区別しています。Lenten (四旬節) とは復活祭 (3月22日~4月25日頃) 前の40日の準備期間のことで2-4月頃を指し、明らかに*niger*種とは開花時期が異なります。ギリシャ北西部、トルコ北西部、ロシアコーカサス地方など古代オリエント地方原産の常緑多年草で*niger*種と非常によく似ています。開花時期以外の違いは草丈が40-60cmと少し高く、葉に粗い鋸歯があり、花色が白色、帯緑色、クリーム色、赤色のほかし、赤色の斑点、赤色の縞模様など変化に富んでいるところが異なっています。花色が豊富なことは、他種との交配により多くの品種が作り出され、国内での栽培は*orientalis*種が主体になっています。

プリニウス (23-79) の『博物誌』に「根はタマネギ (*Allium cepa*) のように層になっている。黒ヘレボレムはウマやウシやブタを殺す」と毒草であると言っています。紀元前595年のギリシアでデルフォイの隣保同盟とキラとの間で、第一次神聖戦争が勃発したとき、キラの攻略にデルフォイ人が採った戦略が、水路に毒を流すというものでした。このとき用いた毒がHelleboreであると伝えられています。ギリシャ語のelein (傷害する) とbora (食品) に由来し、毒性のあることを表している名です。毒成分は強心作用を持つステロイドで、不飽和6員環ラクトンを持つ蟾酥 (*Bufo bufo gargarizans*) の強心成分と同じ構造をしています。

また薬としては、同じくプリニウスの『博物誌』に「癲癇や、眩暈、憂鬱症、精神錯乱、狂気、白いエレファンティアシス (おもに象皮病)、レブラ (乾癬などの皮膚病)、強直性痙攣、震え、足の痛風、水腫、初期の中耳炎、胃病、顔面痙攣、坐骨神経痛、ヘレボム以外では治すことのできない四日熱、慢性の咳、鼓腸、周期的な疝痛を癒す」とあり、多くの病気に用いていたことが分かります。

キリストにまつわる神話も残されています。「キリストが誕生したその日、マデロンという羊飼いの貧しい少女が、聖母マリアのもとへ祝福に訪れました。少女は、何か捧げものをと探したものの、季節は寒い冬。1輪の花すら見つけることができず、がっかりして涙を流しました。すると、少女の涙は種となり、その種から芽が出て、なんとバラのように美しい純白の花を咲かせ始めたのです。少女は幸せに満ち、その花を聖母マリアと幼子キリストへ捧げました」と、美しい花は園芸的価値も高いことを示しています。

(村上守一 記)